

セッション 13 : 司会の言葉

馬 場 雅 行

放射線医学総合研究所重粒子医科学センター病院

新規抗癌剤の出現により，非小細胞肺癌に対する化学療法は選択の幅が大きくなってきている。抗癌剤の抗腫瘍効果と患者の QOL は相反することが多い要素であることから従来は抗癌剤の選択が困難であった。しかしながら，Gemcitabine (GEM) や Vinorelbine (VNR) などの比較的毒性が低い新しい抗癌剤の登場により肺癌に対する化学療法はその適応を広げつつある。このセッションでは，GEM と CDDP および GEM と VNR の組み合わせによる化学療法について報告がなされた。GEM および VNR はいずれも単独での奏効率が 30% 程度と良好で，毒性が低い抗癌剤であり，他の薬剤との組み合わせは抗腫瘍効果の向上の点においても期待が大きい。第一席では術後再発非小細胞肺癌に対し GEM と CDDP の併用が奏効した症例の報告がなされた。術後再発に対しすでに他薬剤とともに使用されていた CDDP に GEM を併用して奏効した症例の報告で，GEM の有効性ととも障害の軽さからセカンドラインあるいはサードラインとしての使用を可能にする薬剤であることを示唆している。また，第二席では非小細胞肺癌術後再発例に対する GEM および VNR による外来化学療法の成績が報告された。これらの薬剤は障害が比較的軽度であることから，外来抗癌剤化学療法を可能にしている。CDDP を中心とする従来の強力な化学療法に比べても奏効率が低下しておらず有効なレジメンとして期待できる。両報告とも低侵襲の新しいレジメンが抗癌剤化学療法を発展させる可能性を示す発表であり，おおいに読者の参考になるものと期待する次第である。